

Tsumama project

平成23年度 特別経費

伝統文化を起点とした実践的教育モデルの構築

つままプロジェクト

富山大学芸術文化学部教授 武山 良三



プロジェクト概要と特徴

芸術や文化は決まった答えがある分野ではありません。それだけに教室の中だけでは学べない経験的知識や具体的なものづくりを通じて熟練された技術を、学生にどのように身につけさせるかが教育課題になります。

富山大学芸術文化学部では、前身である高岡短期大学の時代から地域と連携した具体的事業の中で、教育効果を上げる実践型教育を推進してきました。その流れの中で文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」^{註1}、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」^{註2}を獲得してきました。

これらの取り組みを通じて、学生が実践的な知識や技術を身につけられるだけでなく、その基礎になる生活の在り方を見直す力、考える力、コミュニケーションする力も養えることがわかってきました。

高岡には、江戸時代に加賀藩の前田利長が興した鋳物や漆器などの地場産業がありますが、ライフスタイルの変化などにより販売が低下し、後継者の育成が課題になっています。また、駅前の商店街には空き店舗が目立つなど中心市街地の衰退も深刻です。地域連携により、学生がものづくりの現場やまちなかで積極的に活動することは、地域に活力を与え関係者のモチベーションを高める効果も見られました。

「つままプロジェクト」^{註3}は、このような背景から芸術文化学部が行ってきたさまざまな地域連携教育を総括し、同年4月に創設した大学院芸術文化研究科および芸術文化学部の教育を充実させるプログラムにするため平成23年度より実施しています。

プロジェクトは、以下の8つのプロジェクトで構成されています。

1. 地域連携プロジェクト：地域連携活動の統括
2. ギャラリープロジェクト：芸文ギャラリーの運営他
3. 開発プロジェクト：県デザイン経営塾他
4. 文化財修復プロジェクト：曳山修復他
5. 地域活性化プロジェクト：金屋町楽市他
6. まちづくりプロジェクト：まちづくり事業の統括

7. 創造的教育環境整備プロジェクト：学内を学生作品で埋めつくそうプロジェクト他
8. 情報発信プロジェクト：連携キャラバンの実施、提携校との交流

研究科および学部教育を担当する教員全員が、いずれかのプロジェクトのメンバーとなり組織的に取り組んでいます。

プロジェクトはそれぞれが目標を持っていますが、具体的な取組内容はプロジェクトを横断して行われています。例えば、ギャラリープロジェクトでは、高岡市他と共同して「芸文ギャラリー」を開設していますが、ここでの展示物の一部は商品開発プロジェクトでつくられたものです。また、地域活性化プロジェクトで開催された「金屋町楽市inさまのこ」は、情報発信プロジェクトとして東京・丸の内に於いて展示とトークショーを行い、高岡発のものづくり力をアピールしました。

学生への教育的観点からプロジェクトを横断して整理すると次のような取り組みが実施されています。

1. 特別講義の実施：第一線で活躍する専門家等による講義
2. 見学会の実施：文化財や先進事例の見学
3. 第三者からの助言・評価：専門家や産業関係者等による講評会の実施
4. 具体的プロジェクトへの参加：富山県や高岡市が実施する事業への参加
5. 成果物の作成：実際に使われる印刷物や製品の作成
6. プレゼンテーション機会の創出：学外者等第三者を対象とした発表
7. 海外との交流：海外協定校との交流

以下にいくつかの具体的事例を写真で紹介합니다。

註1：平成16年に「学内を学生作品で埋めつくそうプロジェクト」が採択

註2：平成16年に「炉端談義プロジェクト」、平成17年に「世界に開かれた高岡まちづくり」、平成19年に「出会い・試し・気づき・つなぐ芸術文化教育—ものに語らせる連鎖型創造授業」が採択された。

註3：プロジェクト愛称。正式名称は「伝統文化を起点とした実践的地域連携教育」

右図：情報通信技術の進展により世界がボーダレスな「Gloval village」になる今日こそ、地域固有の風土や文化を吸収した人材が求められている。つままプロジェクトが推進する地域連携教育は、地域で学び、世界で働くことのできる“グローバル人”を育成を目指している、ということを示した概念図。



図1：第一戦で活躍する専門家を招いての特別講義。平成23年度は21件を行った。写真は学部授業の「高齢社会の情報文化」における、株式会社ユーディット代表取締役の関根千佳氏の講義。



図2：青森県六ヶ所村にある核燃料再処理工場を舞台とした映画「へばの」の監督・木村文洋氏を招いてのトークショー。昼間に大学で特別講義を行った後、夜は一般参加者も交えての討論を行った。



図3：見学会は6件行った。写真は研究科「課題研究」と学部「環境造形（平面）」の履修生を対象とした福光美術館・安居寺の見学会。福光美術館では館長の奥田達夫氏から説明を受けた。



図4：高岡の古い町並みが残る吉久の民家において実施した研究科「木材工芸特別演習A」の公開講評会。日本画家の増川武雄氏、東保表具店の東保直志氏、そして近隣住民の方々から評価があった。



図5：研究科「デザイン学特論」の講評会は、環境デザインの分野で全国的に活躍している島津勝弘氏から講評を受けた。特徴が際立つグラフの作成方法からプレゼンの仕方まで具体的な指導があった。



図6：学部間協定を結んでいるブラハ美術工芸大学建築学科長・前学長のイジー・ベルツル氏からアドバイスを受けた。



図7：富山県と平成18年より開催している「富山県デザイン経営塾」。平成23年度は北陸新幹線の車両をテーマに「高岡伝統産業の新ジャンルへの展開」をテーマに開催した。



図8：富山県デザイン協会及び県内企業と平成19年より開催しているワークショップの発表会。企業の若手開発者と3ヶ月～半年間をかけてテーマにもとづいた商品開発を行った。



図9：富山の特産のひとつである飾りかまぼこの新たな用途開拓を目標に行った商品開発プロジェクト「かまぼこ大学」。学生とプロのデザイナーがプロジェクトチームを構成して実施した。



図10：「かまぼこ大学」で開発したかまぼこの試食会。学生は業界関係者を前に、開発意図について説明を行った。配布したパンフレットも学生チームが制作した。



図11：地域活性化プロジェクトである「金屋町楽市 in さまのこ」での使用を目標に商品開発プロジェクトとして展示用照明を制作した「プロダクトデザイン実習B」の授業。



図12：県内若手クラフト作家の展示販売会「クラフトマンズギャザリング」のリーフレットは、学部「CGデザイン」の授業でデザインしたものから選定した。



図 13：高岡の都市政策やまちづくりへの提言等をまとめた書籍『高岡芸術文化都市構想 都萬麻 01』。高岡市長はじめ関係者に配布し、芸術文化学部が推進する地域連携について情報発信した。



図 14：つままプロジェクトの意図や取組内容を紹介するパンフレットやホームページを制作し、学内外への広報を推進した。



図 15：金屋町一帯を会場にして開催している「金屋町案内 in さまのこ」を東京駅前の丸の内で開催。合わせて「地方からの発信」をテーマとしたトークイベントを開催した。



図 16：芸文ギャラリーの展示企画から生まれた「図工女子」は、渋谷の商業施設 PARCO からの要請を受けて東京でも開催。地方での取組が、全国レベルで評価されることが確かめられた。

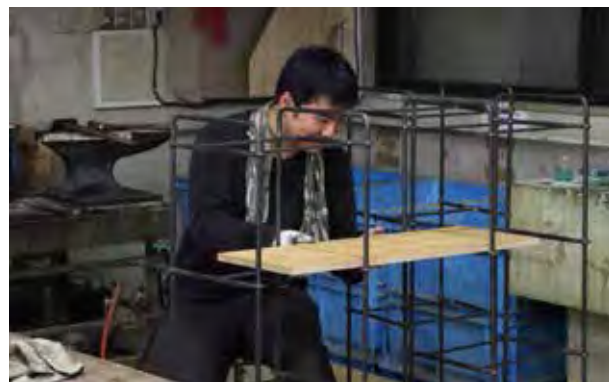


図 17：新しく移転した芸文ギャラリーで用いる展示什器を制作する研究科生。単品でなく、まとまった数を精度を揃えて制作することを具体的に学んだ。



図 18：教員研究室の前に設置された大型の掲示板。教員の取り組み等が日常的に確認できるようになっている。掲示の仕方など学生が試行錯誤しながらデザインした。